

平成 21 年 6 月 16 日現在

研究種目：基盤研究(B)海外学術調査
 研究期間：2006～2008
 課題番号：18401046
 研究課題名（和文） 明治期における西洋近代とアイヌ民族の出会いに関する
 文化人類学的研究
 研究課題名（英文） Anthropological Study on the Encounters between Ainu and the Foreign
 Scientists in the Meiji Era
 研究代表者
 出利葉 浩司 (DERIHA KOJI)
 北海道開拓記念館・学芸部・研究員
 研究者番号：40142088

研究成果の概要：

明治年間に北海道を訪問し、アイヌの人びとに出会った西洋人とくにアメリカ人が残した記録類について、「出会い」という視点からながめてみることに本研究の目的である。日記、書簡類などのうち、ハイラム・ヒラー書簡、ロミン・ヒチコック講演草稿、セントルイス万国博覧会におけるフレデリック・スター収集資料記載情報については、翻刻、翻訳し、公表することができた。また、セントルイス万国博覧会、ロンドン万国博覧会をめぐる人類学的問題について、調査された資料をもとに、それぞれ論考をまとめることができた。

交付額

(金額単位：円)

| | 直接経費 | 間接経費 | 合計 |
|--------|-----------|-----------|------------|
| 2006年度 | 3,600,000 | 1,080,000 | 4,680,000 |
| 2007年度 | 3,200,000 | 960,000 | 4,160,000 |
| 2008年度 | 2,900,000 | 870,000 | 3,770,000 |
| 年度 | | | |
| 年度 | | | |
| 総計 | 9,700,000 | 2,910,000 | 12,610,000 |

研究分野：文化人類学

科研費の分科・細目：人文学 A 文化人類学・民俗学

キーワード：アイヌ民族、博物館資料、博覧会、調査記録、西洋近代

1. 研究開始当初の背景

19世紀から現在に至るまで、アイヌ文化は国内外の研究者によって調査され、モノ（以後、資料とよぶ）が収集されていた。収集された資料のうち、海外の博物館に所蔵された物質文化資料については、これまでヨゼフ・クライナー（1983年より）、小谷凱宣（1990年より）、荻原真子（1998年より）をそれぞれリーダーとする研究チームにより調査され、それぞれ報告書が刊行された。

これらの研究の目標は、まず、全資料の所在確認とそのインベントリーの作成、それに

基づく物質文化における時間差と地域差の研究、つまり収集「当時の技術および社会のそのの」復原研究であった。

これらの研究の成果は、先述の報告書のほか、個別論文として発表されている。海外の博物館が所蔵するアイヌ資料には、国内施設が所蔵する資料に比べて、収集時点での民族学的情報を豊富に持つものがおおく、とくに物質文化研究の分野では、そうした資料をもちいたアイヌ社会や文化の研究が進展しつつある。

アイヌ民族との関連でいえば、(財)アイ

又文化振興・研究推進機構がおこなってきたアイヌ工芸品展での資料選定に活かされており、アイヌの人びとの伝統的工芸品継承活動に貢献してきた点が、成果としてあげられる。

ところで、海外の博物館が所蔵するアイヌ資料の特徴は、資料そのもののもつ価値だけではない。つまり、収集時点で、収集者あるいは調査者により記録され、撮影された日記や調査ノート、写真類の豊富さがもう一つの特徴であることが、調査の時点ですでに指摘されていた。

もちろん、このようなドキュメント類は、物質文化資料のインベントリー作成、物質文化資料の研究において、すでに活用されている。しかし、ドキュメントそれ自体を研究対象とし、それ自体を「読み解」く研究は未だなされてはいなかった。

そこに意義を見だし、このようなドキュメント類を、物質文化研究とは別の角度から理解し直そうというのが、本研究である。モノの収集時点で起こったできごとは、博物館資料の収集というだけでなく、研究者とアイヌ民族との出会いとしてとらえることができる。その出会いを人類学の課題として考えようとするのが本研究の出発点であった。

なお、出利葉浩司（研究代表者）は、以前「博物館民族資料はいかに収集されたか-明治年間に残された外国人の記録から-」（『北海道開拓記念館研究紀要』第25号、1997年）において、ドキュメント類の分析をもとにした考察をおこない、アイヌ民具が収集される時点の状況を考察したことがある。本研究は、かかる研究の延長線上に位置するが、人類学上の視点という点では、両者はことなつたものである。

2. 研究の目的

この研究は、明治期を中心とした時期の北海道において、先住民族であるアイヌの人々が、欧米の研究者と出会う、その現場を人類学的にとらえ、そこで起こったできごとを西洋が発明した文化装置である博物館をキーワードに、歴史人類学的、文化人類学的に考察し、「アイヌ文化」が20世紀前半の西洋社会に領有されていく過程を検証することを目的としている。

「アイヌ文化」研究というより、むしろアイヌと西洋両文化の接触、文化領有機能を備えた博物館、およびそれを支えた社会に重きを置いた研究である。

3. 研究の方法

本研究の基礎資料となる文献類・写真類について、それらを所蔵する博物館、文書館、図書館などにおいて調査をおこない、必要なものについては複写をつくるのが基本と

なる。複写については、鉛筆書き、ペン書きなど筆記具の性質を考えるとコピーによる方法ではその後の判読が難しく、したがって複写方法は、コンピューターでの分析および現在の技術水準を考慮し、スキャナーあるいは高密度によるデジタル撮影とした。このため現地に赴き、資料を実見し、複写作業することがまず必要であった。

調査（複写）した資料のうち、とくに文献類は「手書き」であるため、翻刻作業が必要である。内容には北海道の地名、アイヌ語名称、アイヌの人々の生活にかんする記述が含まれるため、より、そうした状況にあかぬ日本側での作業をおこなった。また、写真資料については、高解像度撮影したものを、整理し、複数のメディアに保存し活用にそなえた。

この作業のあと、とくに文献資料のうち、国内では未公開であり、なおかつさまざまな分野の研究に寄与しうると判断されたものについて、まず、翻訳し解題を付したうえで公表した。この際、アイヌの人びとの生活の描写については、とくに注意を払い、偏見や不必要な誤解が生じないように注意した。

また、セントルイス万国博覧会において撮影された写真類、終了時に購入されたアイヌ資料およびその状況をものがたる文献類、ロンドン万国博覧会における写真類、絵葉書類、ロミン・ヒチコック関係文献類については、論考として発表した。

4. 研究成果

海外の博物館に残されたアイヌ資料のうち文字や写真で残されたものすなわち記録類を文化人類学研究に活用することについて、当時のアイヌ社会や文化、生活技術を復原する研究ではなく、調査あるいは収集の時点におけるアイヌと、調査者あるいは収集者双方のあいだでおこなわれた「交渉」に視点をおいた研究である。

本研究では、おもに北米の博物館や図書館が所蔵している資料類の調査をおこない、ベンジャミン・ライマンやロミン・ヒチコック、ハイラム・ヒラーなどが残した手紙類や原稿の草稿類、フィールド博物館（シカゴ）やペンシルベニア大学付属博物館（フィラデルフィア）にある所蔵資料に関連する情報類、セントルイス万国博覧会に関連する文献・写真類、これらを複写することができた。

これらについて、写真類は、「肖像権」の処理あるいは画像「内容」自体の問題もあり、研究期間内に、詳細がわかるかたちで公表することはできなかった。また、文書類についても、予想以上の量があり、すべてを翻刻、翻訳することはできなかった。こうした資料類は、さらに今後の研究につながる基礎資料

ということが出来るものであり、今後の課題としたい。それらを複写することができたことは大きな成果であるといえる。

ここでは、本研究の成果として公表されたいくつかの論文、ノートについて内容を紹介することにしたい。

1904年にアメリカ合衆国セントルイスでおこなわれた万国博覧会は、アイヌ民具が展示されただけでなく、実際に9人の人々がセントルイスに赴いて、そこでパフォーマンスをおこない、アイヌ民族の存在を世界に向けて発信している。人々が「展示」されたことおよび展示の文脈には、現在の視点から見て批判があるが、それ以外にも、この展示会はさまざまな人類学的アプローチを可能にしてくれる。明治年間におけるアイヌの人々と西洋との「出会い」にスポットを当てる本研究にとっても、中心的課題のひとつである。

出利葉浩司(研究代表者)は、「セントルイス万国博覧会で『展示』されたアイヌ衣服について」(『北海道開拓記念館研究紀要』35号、2007年)のなかで、当時撮影された写真類に写し込まれた「民具類」とくに「衣服」と、フィールド博物館に現存する資料とを比較し、セントルイス万国博覧会会場でアイヌの人々が着用していた衣服すべてがフィールド博物館に収蔵されてはいないことを指摘し、当時、博覧会会場でおこなわれたはずの資料売却(収集)の現場でおこったできごとについて、いくつかの解釈が可能であることをのべた。また、一部の衣服については、複数の人びとによって着用されていた事実を指摘。パフォーマンスに際して衣服の着用自由度があったことを想定し、これまで衣服は個人に属するもので地域的な差を表現するといわれていたことにたいして、疑問を呈した。

さらに、「フレデリック・スターが『選んだ?』アイヌ資料・セントルイス万国博覧会、その後」(『北海道開拓記念館研究紀要』37号、2009年)では、博覧会終了後、フィールド博物館より資料購入に出向いたサイムスが残したと思われる資料にかんする記載を検討した。それにより、資料が収集される、まさにその時点での、アイヌの人びとの中におこったできごとや、アイヌの人びとと収集者サイムスあるいはF.スターとのあいだでおこったできごとに注目し、それを描写した。そして、博物館が収集し、収蔵してきたアイヌ資料にかかわるさまざまな文化人類学的な課題のなかで、収集活動という、収集される側(道具類の所有者)と収集する側(学芸員)との相互実践について、それが再起性のない、ひとつのありようであることを、具体例として提示することができた。

セントルイス博覧会で「展示」され、その

後、フィールド博物館に収蔵され、1990年代になって日本側の研究者やアイヌの人びとによって再認識、再確認された資料類は、たんに、「博物館にアイヌ資料が保存されていた」という事実にとどまらない。1904年からセントルイスにやってきたアイヌの人びととサイムスやスターが出会い、そこで「なんらかの交渉」がおこなわれたことも、同時に示唆していることに注意を払う必要性を指摘した。

宮武公夫(研究分担者・連携研究者)は、「シカゴフィールド博物館所蔵のアイヌ工芸品・1904年セントルイス博覧会と二つのテクンベ」(『北方人文研究』創刊号、2008年)のなかで、これまでいわれてきたアイヌ文様の範疇には含まれないような手袋がセントルイス万国博覧会時に収集された資料のなかに存在することに注目する。さらに1912年に二風谷で収集され、現在はサンクトペテルブルグにある国立民族博物館にある資料にも、当時のアイヌ社会にはみられないはずの素材、デザインを持つ資料があることを指摘した。これらは、従来、「アイヌ文化」のなかに含まれない資料として「無視」されてきたものである。これらの資料が、セントルイス万国博覧会においてアイヌの人びとが他地域から招集された民族とのなんらかの交流を行った結果であるとの見解を述べ、同博覧会会場であった人びとの出会い、交流、ものの移動にスポットを当てた。

また、「人類学写真における他者観の変遷・1904年～1910年」(京城帝国大学関連国際会議講演、2007年)で、1904年のセントルイス博覧会と、1910年の日英博覧会におけるアイヌ展示を対象とした写真史料を比較しながら、植民地主義が純化する過渡期であった20世紀初頭の二つの博覧会の間、アイヌへの『他者観』の急激な変遷を明らかにし、それを受容せざるを得なかったアイヌ博覧会参加者の軌跡を追うことで、同化と排除を進めることになった日本と植民地の関係を考察した。

つぎに、明治年間に北海道を訪れ、アイヌの人々と出会い、記録を残し、さらには資料を収集した西洋人のうち、

(1)ペンシルベニア大学付属考古学・人類学博物館に資料・写真類・記録類を残したハイラム・ヒラー(1867-1921)について、

出利葉浩司は、「ハイラム・ヒラーが残したガラス乾板」(『北海道開拓記念館研究紀要』36号、2008年)において、同大学が所蔵するガラス乾板スライドの内容を分析し、紹介した。

また、矢口裕人(研究分担者・連携研究者)は、同博物館に所蔵されているヒラー書簡を翻訳、検討した。「ハイラム・ヒラー書簡

1901年の北海道より」(『北海道開拓記念館調査報告』47号、2008年)において、ヒラーが主に北海道で1901年に書いた手紙とその翻訳・解題をおこなった。手紙は妹のライダ(そして彼女を通してヒラー家の人びとへ)宛てられたものである。ヒラーが小谷部全一郎とともにアイヌ集落を訪れたことはすでに論じられているが、これまでの議論は主に彼の調査ノートと日記がもととなっており、家族に宛てた手紙の存在はほとんど知られていなかった。したがってこれら一連の手紙はヒラーの旅に関する既存の情報を補完する重要な資料であるといえる。

(2)アメリカ合衆国国立自然史博物館に資料を残したロミン・ヒチコックについて、本研究中にコーネル大学カール・クロック図書館にヒチコック関連資料があることがわかった。ヒチコックは帰国後、北海道およびアイヌ民族についての講演をおこなっており、そのための草稿も実見することができた。

これについて、矢口祐人は「ロミン・ヒチコックが語った北海道・アイヌの人々」(『北海道開拓記念館調査報告』48号、2009年)において本草稿の翻訳を試みている。講演の日時や場所、聴衆などについてはわかっていないが、内容から判断するとアメリカ合衆国内で日本とアイヌに関して興味はあるものの、あまり知識は持っていない人びとに向けて話されたものであると思われる。ヒチコックは1887年来日し、大阪帝国大学で1889年まで化学を教えた。民族学に深い興味を抱き、1884年から99年まではスミソニアン博物館とも関係を持っていた。この講義は1887年夏にアイヌとその文化を調査に行った際の情報にもとづいている。講演ノートによると、44枚の写真が使用されていた。これらの写真の一部はワシントンD.C.にあるアメリカ合衆国自然史博物館にあることが判明しているが、すべての記録は残っていない。この翻訳はヒチコックの講演の初訳であり、1891年のスミソニアン・レポートにある彼のアイヌ記録と合わせて読むと、アイヌ民族がアメリカにおいていかに見られ、理解され、表象されていたかの重要な手掛かりになると思われるものである。

(3)明治年間にお雇い外国人として北海道を訪れ、開拓事業に指導的役割を果たした地質学者ベンジャミン・ライマンについての書簡類、ノートなどがアメリカ哲学協会(フィラデルフィア)、マサチューセッツ大学(アマースト)および北海道大学図書館にのこされている。これらの資料について調査は財部香枝が担当したが、量的に膨大であり、かつ取り扱いに注意を要するため、本研究期間内にすべて調査を終えることはできなかった。

既調査分について、財部香枝(研究分担者、連携研究者)は、「“The Ainos” (1901) by Benjamin Smith Lyman: in Benjamin Smith Lyman Papers, American Philosophical Society, Philadelphia」(『アリーナ』5号、2008年)のなかで引用している。

本研究の方法論にかかわる部分では、宮武公夫が「『人類学写真』の現在」(大阪大学トランスナショナリティ研究セミナー講演、2007年)において、19世紀以来の写真技術の発展によって、非西洋社会の人々や文化を対象として撮影されてきた『人類学写真』について、初期の対象を正確に記録する媒体としての写真への評価から、社会的まなざしにより対象を切り取る操作の手段として批判する、ポストコロニアリズム研究への軌跡を紹介した。また、人類学における写真資料を用いた歴史研究の可能性と、エージェントとしての写真の問題点を、ジェルの時間やアートについての研究などを紹介し、事例として博覧会写真を用いながら説明をおこなっている。

また、一般への普及活動として、出利葉浩司は、北海道開拓記念館における普及講座、ニュース・レターにおいて本研究内容を「あたらしいアイヌ研究の方向」として紹介した。また、本研究で得られた情報の公開については、とくに(財)アイヌ文化振興・研究推進機構が2001年に旭川市、長岡市でおこなったアイヌ工芸品展『アイヌの工芸・ペンシルバニア大学考古学人類学博物館ヒラーコレクション』展に、写真類、日記類など当研究の成果を提供している。なお、かかる展示会には、とりわけ矢口裕人の翻訳が貢献している。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計10件)

出利葉浩司、「セントルイス万国博覧会で『展示』されたアイヌ衣服について」、『北海道開拓記念館研究紀要』35号、25-42、2007年、査読無。

出利葉浩司、「ハイラム・ヒラーが残したガラス乾板」、『北海道開拓記念館研究紀要』36号、69-78、2008年、査読無。

出利葉浩司、「フレデリック・スターが『選んだ?』アイヌ資料・セントルイス万国博覧会、その後」、『北海道開拓記念館研究紀要』37号、95-114、2009年、査読無。

DERIHA, Koji, 「How can we approach the Issue of Ainu Traps? Ainu Hunting of Small Animals in the Nineteenth-Century Fur

Trade System」、『SES (Senri Ethnological Studies)』72、101-115、査読有。

__宮武公夫、「序・科学技術の人類学へ向けて」、『文化人類学』第7巻4号、483-490、2007年、査読有。

__宮武公夫、「シカゴ・フィールド博物館所蔵のアイヌ工芸品」、『北方人文研究』創刊号、41-54、2008年、査読有。

__宮武公夫、「1910年日英博覧会におけるアイヌ展示 ハンマースミスとフルハイム文書館および地域歴史センターにおける写真資料を中心に」、『北海道開拓記念館研究紀要』37号、115-128、2009年、査読無。

__財部香枝、「“The Ainos” (1901) by Benjamin Smith Lyman: in Benjamin Smith Lyman Papers, American Philosophical Society, Philadelphia」、『アリーナ』5号、482-505、2008年、査読無。

__矢口祐人・出利葉浩司、「ロミン・ヒチコックが語った北海道・アイヌの人々」、『北海道開拓記念館調査報告』48号、113-130、2009年、査読無。

__矢口祐人、「ハイラム・ヒラー書簡・1910年の北海道より」、『北海道開拓記念館調査報告』47号、87-100、2008年、査読無。

〔学会発表〕(計3件)

出利葉浩司、「現代の民族資料を収集すること」、『第23回北方民族文化シンポジウム、2008年10月19日、北海道立北方民族博物館。

__宮武公夫、「『人類学写真』の現在」、『大阪大学トランスナショナリティ研究セミナー、2007年2月23日、大阪大学。

__宮武公夫、「人類学者 心における他者観の変遷・1904年～1910年」、『韓日国際ワークショップ：帝国の「学知」と京城帝大の教授達、2007年6月、ソウル大学(韓国ソウル市)。

〔図書〕(計2件)

出利葉浩司、「今日のアイヌの人びとの活動を展示すること」、『第145回テーマ展 北の手仕事』所収、3-5、2007年、北海道開拓記念館。

出利葉浩司、「現代の民族資料を蒐集すること・北海道開拓記念館のアイヌ民族資料の収集を例に」、『第23回北方民族文化シンポジウム報告書』所収、29-34、2009年、道立北方民族博物館。

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

取得状況(計0件)

〔その他〕

出利葉浩司、「博物館にあるアイヌ資料研究・もうひとつの流れ」、『北海道開拓記念館だより』36巻4号、2007年。

出利葉浩司、「あのアメリカ自然史博物館にあるアイヌ文化資料とバシフォード・デーモン」2007年5月20日、北海道開拓記念館における一般向け講演会。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

出利葉 浩司 (DERIHA KOJI)

北海道開拓記念館・学芸部・研究員

研究者番号:40142088

(2) 研究分担者(2006,2007年度)

宮武 公夫 (MIYATAKE KIMIO)

北海道大学・文学研究科・教授

研究者番号:50291993

財部 香枝 (TAKARABE KAE)

中部大学・国際関係学部・准教授

研究者番号:00421256

矢口 祐人 (YAGUCHI YUJIN)

東京大学・総合文化研究科・准教授

研究者番号:00271700

(3) 連携研究者(2008年度)

宮武 公夫 (MIYATAKE KIMIO)

北海道大学・文学研究科・教授

研究者番号:50291993

財部 香枝 (TAKARABE KAE)

中部大学・国際関係学部・准教授

研究者番号:00421256

矢口 祐人 (YAGUCHI YUJIN)

東京大学・総合文化研究科・准教授

研究者番号:00271700

